

令和 2 年 6 月 4 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02552

研究課題名(和文)シュルレアリスム芸術の理論と創作における心霊主義の受容

研究課題名(英文)The influences of spiritualism on the theory and creation of Surrealist art

研究代表者

長谷川 晶子 (HASEGAWA, Akiko)

京都産業大学・外国語学部・准教授

研究者番号：20633291

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、シュルレアリスム芸術と理論における心霊主義の受容について、神秘体験の理論化と創作活動のモデルとして霊媒芸術が与えた影響という問題設定から明らかにすることを目指した。入手困難な資料を調査して分析するという文献学的作業を基本とした。雑誌、新聞や著作から当時の心霊主義の活動を再構成し、シュルレアリストたちの見解を参照しながらテキスト分析を行った。1920年代から1940年代に至るまで、霊媒芸術がシュルレアリスム運動の審美的な判断基準、理論、創作に対して影響を与えたことを論証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、これまであまり光の当てられてこなかった霊媒芸術が、1920年代から40年代までのシュルレアリスム運動の審美的な判断基準、理論、創作に対して影響を与えたことを明らかにした。加えて、本研究を進める過程で、ジョゼフ・クレパンというフランスの心霊主義を代表する画家に関するモノグラフを出版することによってフランス本国でもほとんど研究の進んでいない霊媒芸術の創作を日本で紹介することができた。

研究成果の概要(英文)：In this research, I tried to clarify the influences of spiritualism on the Surrealist art and theory. I supposed that Surrealists regarded the spiritualist art as one of the important model for theorization of mystical experiences and creative activities. I proceeded this research by collecting and classifying materials, which are very difficult to find, and by analyzing theoretical texts and paintings. I demonstrated that medium arts influenced the aesthetic criteria, theories and creations of the Surrealist movement from the 1920s to the 1940s.

研究分野：フランス文学、フランス美術

キーワード：シュルレアリスム アンドレ・ブルトン 心霊主義 霊媒芸術 アール・ブリュット

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

報告者はシュルレアリスムの美学の問題を研究している。これまではこの運動の理論家アンドレ・ブルトンの美術論を中心に、シュルレアリスムが非西洋の芸術を取り入れるだけでなく、芸術と人間の根源的な関係を問い直したことを明らかにしてきた。以上を踏まえて、シュルレアリスムの美術論がヨーロッパの「内なる他者」、つまり社会の周縁に位置する人間の創作活動をどのように評価したのかという問いを追究している。

本研究においては、19世紀後半から20世紀半ばにわたってヨーロッパで流行した心霊主義とその創作活動がシュルレアリスムに与えた影響の解明を課題とする。先行研究では運動の理論的指導者アンドレ・ブルトンの文学的な実験に対する心霊主義の影響の範囲が検証されてきた。報告者は心霊主義の影響がブルトン個人の文学的営為に留まらず、シュルレアリスムの審美思考、創作、運動の展開にまで及ぶと想定した。心霊主義の理論、創作との比較検討を通して、運動発足時の1920年代から40年代までのシュルレアリスムが心霊主義を借用しながら独自の芸術活動としての道を開拓した事実を論証することを目指した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、20世紀の芸術運動シュルレアリスムが心霊主義をモデルとして展開したという仮説を証明することである。シュルレアリスム芸術は、創作の原体験に着目した芸術論を構築する上で心霊主義を借用しただけでなく、霊媒芸術を参照しながら創作活動を行った。以上を文献学的に実証することにより、シュルレアリスムにおける心霊主義の受容の射程を画定することを目指した。

シュルレアリスムの芸術と美術論が心霊主義の思想、方法論と創作をどのように受容し、利用したのか、その射程の画定を目指す本研究は、大きく(1)神秘体験の理論化、(2)創作モデルとしての霊媒芸術、(3)シュルレアリスム美術に対する影響から成る。

(1) 神秘体験の理論化

まず、シュルレアリスムが心霊主義を疑似科学の文脈から芸術の領域へ移しかえた過程を再構成する。ブルトンやアラゴンは、心霊主義に懐疑的な姿勢をとりながらも、憑依状態や忘我に関する証言をヒントにして、無意識的な創作という理論を構築した。「霊」が命じる通りにデッサンを描く霊媒に、受動状態での創作活動のモデルを見出した。また、霊媒のデッサンを評価することで、見る人を不安にさせる美という基準の提唱につながった。このように芸術論の確立において心霊主義から影響を受けたことを明らかにする。

(2) 創作モデルとしての霊媒芸術

次に、シュルレアリスムが美に関する思考と理論だけでなく、創作活動の実践において、心霊主義の産物である「霊媒芸術」を参照したことを明らかにする。霊媒芸術の実態はフランス本国でもあまり研究されていない。詳細な調査によって、霊媒芸術の創作がどのように行われたのかを再構成する。

(3) シュルレアリスム美術に対する影響

シュルレアリスムの美術論は、ルサーージュをはじめとする心霊主義の画家の象徴的な表現力を高く評価した。この評価基準がシュルレアリストの絵画の評価にも援用されると、画家たちは霊媒芸術をモデルとして一層創作活動を展開するようになる。ロベール・デスノスらの自動的デッサン、タンギーやブローネルなどの油絵の創作を対象として、シュルレアリスム美術が霊媒芸術から影響を受けつつも独自の発展を遂げた過程を示す。

3. 研究の方法

シュルレアリスム芸術と理論における心霊主義の受容を明らかにする本研究は、資料収集、それからテキストの綿密な読解、そして草稿と書簡の分析によって、シュルレアリスムの理論と実践に対して心霊主義の与えた影響の射程を確定しようとした。

本研究のコーパスは、1920年代から40年代までにシュルレアリスムと心霊主義の機関誌に発表された芸術に関する理論的テキスト、デッサンや油彩、展覧会や降霊会の資料である。現在入手困難であるものが多数含まれるため、資料を入手、調査して分析するという文献学的作業が基本となった。第一年度は創作理論、第二年度は心霊主義の創作活動、最終年度はシュルレアリスム美術における理論と創作を繰り返す運動体としての展開に焦点を当てて、それぞれのテーマに応じて文献学的調査を行い、心霊主義がシュルレアリスムに与えた影響の射程を画定することを目指した。

第三年度に、心霊主義の画家ジョゼフ・クレパンに関する著作を出版する機会を得たため、シュルレアリスムの創作活動に関する研究に多少の遅れが見られたが、補助事業期間延長が認められたおかげで、著作を出版しつつも、当初3年間で計画していた本研究を4年で完成させることができた。

4. 研究成果

本研究の成果は主に以下5つである。

(1) 神秘体験の理論化に関する研究

シュルレアリストたちが読んだと考えられる心霊主義関連図書の調査から始めた。ブルトンのみならず、ルイ・アラゴン、ルネ・クルヴェル、とりわけロベール・デスノスの書簡やテクス

トを調査し、特に彼らが読んでいた心霊主義の雑誌『心霊雑誌』、『超心理学雑誌』や、心霊主義の代表的な理論家アラン・カルデックやその後継者レオン・ドゥニのテクストの資料を収集し、読解を行った。科学者たちの結成した国際心霊現象研究所(IMI)はオートマティスムに関心を寄せていた。心霊主義とシュルレアリスムはオートマティスムに対する関心の高さで共通しているが、それ以上に、神秘的な体験を報告する文体の類似、神秘体験を理論化する方法の類似が著しいことが明らかとなった。

(2) 創作モデルとしての霊媒芸術に関する研究

シュルレアリストたちが心霊主義に関心を抱いていた時期(1920年代から1930年代半ば、1940年代半ば)のフランスにおける心霊主義の活動の実態を調査した。シュルレアリスムに心霊主義を導入したクルヴェルを降霊術に誘ったダンテ夫人なる霊媒を特定することはできなかったが、30年代にはマダム・フレイヤなる有名な霊媒が活躍し、週刊誌に取り上げられるほど一般的なトピックであったことを確認することができた。心霊主義の理論書と霊媒の絵画創作との関係を明らかにするため、有名な霊媒画家エレーヌ・シュミット、ジョゼフ・クレパン、オーギュスタン・ルサーージュを調査した。心霊主義における創作と理論の関係は、必ずしも理論が先行しているわけではなく、絵画実践(急に手が動くようになった)が先行することすらあった。それゆえ、心霊主義では実例が非常に重宝されていた。演繹的ではなく帰納的な思考が心霊主義にはみられる。シュミット、ルサーージュ、クレパンの絵画実践に関する研究は「フルーリ・ジョセフ・クレパンと近代心霊主義」(『京都産業大学総合学術研究所所報』(11)、2016年、25-44ページ)にまとめて発表した。

(3) 霊媒画家フルーリ・ジョゼフ・クレパンに関する研究

(2) 創作モデルとしての霊媒芸術に関する研究から派生して、フランスの心霊主義を代表する霊媒画家クレパンに関する研究を行った。アンドレ・ブルトンに死の直前に評価されたことで世に知られるようになったこの画家は、フランスでもほとんど研究が進んでいない。この画家の人生と作品に関する調査を北フランス(特にリール・メトロポール美術館付属図書館と画家の生地エナン＝リエタール)で集中的に行った。この調査と分析の成果は著書『フルーリ・ジョゼフ・クレパン 日常の魔術』(水声社、2018年、248ページ)でまとめている。クレパンが暮らした北フランスは落盤事故や火災などが多発した鉱山が多く、二度の戦争に巻き込まれて破壊された土地でもある。そこに暮らす人々が死者との交流を強く望んだことから心霊主義が流行したと考えられている。自分が絵を描くことで戦争を止めることができると信じたクレパンだったが、彼の創作と生活は密接に繋がっている。現地調査を行ったことで、北フランスに存在する教会や建築物と絵画作品に描かれた建造物の造形的な類似を具体的に明らかにすることができたことは大きな成果である。

(4) 霊媒芸術を評価するシュルレアリスムの美学に関する研究

シュルレアリスムの理論家ブルトンの芸術観を明らかにするため、同じく霊媒芸術を擁護したアール・ブリュットの理論家デュビュッフェの芸術観と比較し、双方の美学の相違点を明らかにした。デュビュッフェが言葉を必要としない身体で感じさせる作品を高く評価したのに対し、ブルトンは世界の新しい見え方を喚起する、想像力を刺激する作品をよしとした。この成果は「シュルレアリスムとアール・ブリュットの引力/斥力」『ユリイカ』8月臨時増刊号「ダダ・シュルレアリスムの21世紀」(2016年、131-141ページ)で発表した。

(5) シュルレアリスム美術に対する心霊主義の影響に関する研究

シュルレアリストたちの自動記述、自動デッサンの実験の実態と美学の解明を試みた。特にロベール・デスノスの初期デッサンが調査できるようになったこともあり、多くの自動デッサンを分析することができた。当初想定していた心霊主義とシュルレアリスムの理論と創作の全般的な影響関係は実証できなかったものの、それらの類似性のいくつかを指摘することができた。シュルレアリスム運動の倫理性が心霊主義との大きな差異であると考えられる。研究レビュー「アール・ブリュットとシュルレアリスムの重なるところ」(日本フランス語フランス文学会 HP、2018年、<http://www.sjllf.org/cahier/>)で心霊主義も含むアール・ブリュットとシュルレアリスム、そしてフランスの心霊主義の創作活動に関する最近の研究動向をまとめて発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 長谷川晶子	4. 巻 11
2. 論文標題 「フルーリ・ジョゼフ・クレバンと近代心霊主義」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『京都産業大学総合学術研究所報』	6. 最初と最後の頁 25-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長谷川晶子	4. 巻 8月号
2. 論文標題 「シュルレアリスムとアール・ブリュットの引力/斥力」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『ユリイカ』8月臨時増刊号「ダダ・シュルレアリスムの21世紀」	6. 最初と最後の頁 131-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 長谷川晶子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 243
3. 書名 フルーリ・ジョゼフ・クレバン 日常の魔術	

〔産業財産権〕

〔その他〕

長谷川晶子「フルーリ・ジョゼフ・クレパンと近代心霊主義」(『京都産業大学総合学術研究所報』第11号、2016年、p. 25-44)
https://ksu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2930&item_no=1&page_id=13&block_id=21

長谷川晶子「アール・ブリュットとシュルレアリスムの重なるところ」(日本フランス語フランス文学会のHPに掲載された研究レビュー)
<http://www.sjllf.org/cahier/>、2018年

ソフィー・バスティアン「アンドレ・ブルトンとアルベール・カミュの関係」の翻訳(『京都産業大学論集 人文科学系列』第53号、2019年、3-13ページ)
https://ksu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=10465&item_no=1&page_id=13&block_id=21

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----